宇部市文化振興まちづくり審議会　会議概要

日　時：令和３年(2021年)8月23日（月）15：00～16：50
場　所：原則としてオンライン
　　　　対面参加者は、文化会館２階 研修ホール
出席者：委員７人（欠席３人）
事務局：安光観光・ＣＰ部次長
　　　　荒武文化・スポーツ振興課長、新原文化・スポーツ振興課副課長、
　　　　酒井文化振興係長、中島主任、片山主任

１　議事

（１）文化振興ビジョン改定案（骨子）について

文化振興ビジョン（第三次）改定案　骨子について、事務局より説明。

（会長）　既存の計画に比べ新しい概念が多く入っているので、その部分で気づきがあれば順次発言をお願いします。
　まずは、私から気になった部分を伺います。
　改定案の５ページの中段あたりの説明で、本市がかつて経験した戦災や煤じん公害、地域社会の問題などがありますが、これはいつ頃のことなのか記載した方が良いでしょう。
　戦後の1950年前後くらいでしょうか？

（事務局）　そのとおりです。

（会長）　いろいろな世代の市民が読むし､世代も次々に変わっていくので、文章に年代が入っていると理解しやすい。
　それから､今回､ＳＤＧｓが新たな概念として提案されたもので、宇部市は、進んでＳＤＧｓのことに取り組んで、まちづくりを進められていると聞いており、ＳＤＧｓが入るのは、もちろん私は良いことだろうと思います。これを文化にどう取り込んでいくかということを議論していかなくてはならない。

それから、7ページの社会的包摂のところ「第1」の次の段落のところですが、「社会的弱者」で、「女性」というのが最初に入っており、「女性、高齢者、家族の育児や介護を抱える個人、障害や疾病を抱える個人・・・・」と表現されています。

もちろん、現代の日本社会の中で、女性が社会的・経済的に弱い立場であることは否めませんが、女性も含めて、社会的弱者の概念をもう少し精査する必要があろうと思う。

（事務局）　これは、内閣府の機関である日本学術会議の社会的包摂に関する提言を参考にしましたが、表現については、他の事例も参考にしながら、検討していきたいと思います。

（会長）　また、6ページの多文化共生の部分ですが、外国人登録者の人口が日本では全体で増えているということですが、宇部市にはどれくらい在留外国人がおられるのか？

（事務局）　宇部市の人口は約162,000人で、在留外国人は2,112人です。割合は1.3％で国全体は2.3％なので、全国的にはまだ少ないところですが、近年、大きく増えて一定のコミュニティを形成するまでになっていると思われます。

例えば、旧楠地区の万倉校区の人口より多いところまで増えています。

今後も、さらなる増加が予想されます。

（会長）　地方でも、技能実習生が増えているところが多い。人数や割合などの数字を記載するのが良いだろう。

それから、12ページのところで、対象とする文化芸術ですが、風土の景観のこと「景観文化」とあるが、宇部市の場合は、コンビナートのプラントです。

最初のビジョン策定の時から思っていたが、私は、宇部・山陽小野田のコンビナートプラントの外観は、立派な芸術だと思う。

しかも、実際に製造を行って産業として地域の経済を支えているものだ。宇部の特徴の一つだと思う。

引き続き、産業と関わる文化財、近代化産業遺産などを、宇部特有の文化として考えてもらいたい。

（事務局）　現在稼働している工場などを見学できる「産業観光ツアー」などもあり、宇部・山陽小野田・美祢地域の文化と言えると思います。
ビジョンにもこのことに触れていくよう検討します。

（会長）　周南のコンビナート企業群をはじめ、夜にライトアップして夜景観光に生かしているところが増えてきている。
コンビナートに限らず、宇部の産業遺産を歴史的・文化的に継承していくことが必要だろう。

（委員）　社会的包摂や多文化共生など色々な新しい価値観について盛り込まれているが、用法としては、私どもの団体では、「社会的包摂」ではなく、「社会包摂」と言い、その中に多文化共生も含めた形で事業を行っている。
その意味では、社会的包摂と多文化共生は、別立てにしなくても良いと感じる。
ＳＤＧｓの「誰一人取り残さない」という部分が、社会包摂（ソーシャル・インクルージョン）の「誰一人取り残さない」とイコールなので、一般的な概念・文章をそのまま掲載するのではなく、それらを引用しつつ、宇部の実情にあったように構成し直していくのが良いと感じた。
2点目が、社会包摂事業のところに、「あしながおじさん事業」として載っているが、当方としては「あしながおじさん事業」だけではなく、去年1年間実施してきた「フィジカルディスタンスコンサート」など様々な社会包摂事業もあるので、ここに具体的な事業名として「あしながおじさん事業」だけを掲載するのはどうかと思う。
次に、テーマC重点アクションと目標指標の「アートマネージャー養成者の数」を累計という形で入れておられるが、確かに、講座の参加者数としては実績がある。
しかし、講座を修了した人たちが、こども文化夢教室や小学校ななどのワークショップなどで、プロジェクトリーダーとして活動し

ていくことが大事だが、数はまだ限定的です。

よって、指標としては、「講座の参加者数」、「養成者数」よりは中身・質ではないかなと思う。

（会長）　アートマネージャー養成者数が累計で 2019 年が 42 人、これを数字だけではなくて、中身で表現できたら良いという考えですね？

（委員）　そうです。実際に「アートマネージャー養成講座」では、例えば、「戯曲を読むワークショップ」や、実際に活動していく「ワークショップリーダー養成講座」など様々なものがあるので、この養成者数として、ひとまとめにはするのは少し表現が困難ではないかと思う。

ここに「参加者数」なのか、「養成していく指導者」なのか、ワークショップは開催すればするだけ参加者数は増えるのですが、視点を人材育成と活動の場の創出とすると、やはり指標はワークショップリーダーが活躍できる場の数又は活動数かと思う。

（会長）　累計でいけば数字は増えてきますが、質の問題をそこに入れないといけないわけですね。

（委員）　そうですね。質を見ていただきたいと思います。

（会長）　それから、「あしながおじさん事業」が指標に入っているのに違和感があるということですか？

（委員）　「あしながおじさん事業」だけではなくて、当団体では、バリアフリー事業を積極的に実施しています。

例えば、障害のある方や子ども・高齢者の方など様々な方を対象に「バリアフリーアート事業」を行っております。

また、昨年度の 1 年間は、コロナの影響で、公演などが非常に少なく、「文化に触れる機会が少ない中で実施してきた事業」も、広い意味ではバリアフリーに該当するのではないかとも思っている。

よって、「あしながおじさん事業」だけが指標になるのは違和感

がある。

また、社会的弱者といっても、昨年度までは「経済的に困窮している家庭の子どもたち」を主として事業の対象にしていたが、「何らかの事情により文化事業に来たくても来れない」、「両親が仕事をしていてなかなか来にくい」という場合、そのような層に広く対象を広げていいこうと考えているので、該当事業全般に広げて「社会包摂事業」の実施数で良いと思った。

（委員）　これまでのビジョンでは、策定の背景と目的が記載されていなかったので、何のために策定するのかという意図が市民に伝わって良いと思う。

その中で新しい価値観として、多文化共生と社会包括、文化創造都市、ＳＤＧｓが、箇条書きに(2)、(3)、(4)、(5)と、機械的に羅列されているような感じがします。そのあと(6)で、「宇部市における文化芸術施策の果たす役割」とあるのが、違うつながりのように感じられて、最初に読んだ時に気になった。

新しい価値観を順に説明して、社会包摂とＳＤＧｓが重複しているところがあるというのも感じる。

ＳＤＧｓの中にジェンダーの問題も入っているので、女性が社会的弱者として記載するのもどうかというところも、私も気になったところです。

だから、ここで弱者と書いていいのかということもあるので、それも何かひっくるめてジェンダーの課題とか、バリアフリーとか、ＳＤＧｓと絡めて説明して、そこで新しい価値観として入れましたというのが説明できれば、とてもスマートな説明になっていくのではないかと思う。

もう１点が、先ほどお話にも出た「あしながおじさん事業」です。33 ページの子どもの文化体験推進の項目で、子どもたちのために色々検討されていると思ったのですが、33 ページの説明では、「ひとり親世帯など」と書いてあります。

ひとり親世帯だけでなく、障害のある世帯の方・子どもなどもいるし、両親は揃っていても、経済的に厳しい状態のご家庭もたくさんあるし、経済的には豊かであっても文化的には貧困な子どもも、

実際にはいます。

ですから、ひとり親世帯だけをクローズアップしてしまうのが、どうかなというのが私としては気になった。

先ほどお話が出たように、バリアフリーの活動も「あしながおじさん事業」も様々なことをしているので、それらをひっくるめた形での目標指標へ提示ができればいいなということを感じたところです。

（会長）　私も、そこは気になっていて、ひとり親世帯などは個人情報の範疇なのでしょうが、事業の対象者は、ひとり親世帯だけではありませんが、仮に人数が把握できて、「今年はこれだけ参加した」とすることが、果たして効果的なのかどうかということをちょっと感じます。

変な言い方すれば、「君のところはひとり親だから、援助してあげる必要がある」という、ちょっと恩着せがましい感じになる。

それは、有難迷惑な気もするので、ＳＤＧｓで括れば結構色んなものが取り入れられるので、取組内容は良いとして、表現方法などは再考をお願いしたい。

（委員）　策定の背景と目的の部分が特に論点としてあがっているように伺っておりましたけれど、確かにＳＤＧｓ一つとっても既に他の新しい概念とすべてが相互に接続しているというか、関連しているので、難しいんだろうなと思いながら聞いていた。

ただここは、背景と目的を個別に様々なことに触れたいというように書かれているので、重複部分はある程度削除されたほうがいいかと思いますけれども、それぞれの項目で一番伝えたいことにウエイトを置いて、相互に関連するのだが何とか、上手に表記する道を考えられればと皆さんの意見を聞きながら考えていた。

言葉の使い方で細かいことだが、例えば、6 ページには在住の外国人のことで、在住と形で書かれているが、31・35 ページには、在留という形で外国人の表記が出ているので、これは違う意味で使われていれば構わないが、在留のほうが意味が広くなる気がするので、どちらも多文化ではあるが、表記の統一という点で若干気になった。

また、文章は基本的に「ですます調」で書かれているのだが、「である調」の部分もあるので統一をお願いしたい。

10 ページ下から 4 行目の沖ノ山電車堅坑の「堅」という字が、これは、土ではなくて「竪」という字になると思う。

私としては、全体の統一感を注意しながら案を読んでみた。

（委員）　5 ページの「策定の背景と目的」のところは、背景と目的というタイトルに対して、その、（１）の①②など、流れとか順番を変えればもう少しすっきりすると感じていた。

33 ページの「あしながおじさん事業」は確かに、「ひとり親世帯」が最初に出てくるのは、賛否両論あるだろうし、逆に「障害者」というのも意見があるだろう。

また、「経済的に不安定」って言われると、対象者が動揺・委縮して事業の参加を控えることもあるかも知れないので、表現は慎重に変更していけば良いと思う。

私は、ひとり親世帯に「など」があるから問題ないと思っていたが、敏感に感じられる方もおられると思うので、そこは少しやわらかい表現が良いのではないかと思う。

また、子どもの文化体験という部分に対しては「子どもがどう感じるか」とか、「そのあと子どもが成長の過程でどう活かしていくか」など、後のことが一番大事になっていくと思うので、「一時的に困窮しているから文化体験してみたら」というように誤解されないような取組内容や表現方法にしなくてはならないと感じた。

それと、社会背景が変わってきて、今コロナで困窮している人が多くなっている中で、文化という分野は最初に削られるというか、文化事業の予算が削減されていくことは、個人も法人も同じと思うので、今回、ちょうどビジョンが第三次に変わるタイミングなので、今日のコロナ禍の文化活動の現状がビジョンに映し出されていけたら良いと感じる。

今現在、コロナの感染は拡大中で、現に今日もオンライン会議です。収束する気配も当面なさそうなので、まだ、コロナ禍を前提としての、文化も含めての社会経済活動が続くだろうから、一番影響を受けるのは子どもだったり、社会的弱者と言われている人たちと

思うので、その辺の背景も少し書けると良いと感じた。

（会長）　今、コロナ禍の状態で、2022年から2026年までの5年間の計画策定をしようとしているが、このビジョンが、どのようにスタートをしたら良いのか私も迷うところが大きい。

これは、将来ビジョンだから、現在がコロナの状況にあっても、いずれコロナが収束し、宇部の市民全体に健全な社会経済及び文化活動が復興できている状態を想定した活動内容・目標指標などを設定したとする。

しかし、コロナは依然として収束せず、コロナが原因であらゆる活動が伸びないことは想定される。

しかし、現在、コロナで沈んだ状況でビジョンを想定するのではなくて、コロナが収束を前提として想定しても良いかなと・・・、スタート地点をどうするのか思案していますが、皆さんのご意見をいただきたいと思う。

（委員）　目標指標として二次ビジョンの100指標から、67指標に集約したいということですが、この目標指標というのは、誰に対して目標を課して、誰が達成するって形で運営されているものなのか？

（事務局）　目標指標は、重点アクションの目標指標に加え、例えば「テーマC」なら、36ページに「その他の施策」が1番から20番までります。

市や文化創造財団、文化団体が、文化芸術のために取り組む、働きかける施策、そういったところが目標指標です。

民間の団体、あるいは市民が、自主的・主体的に取り組む活動は、ビジョンの目標指標として設定はしておりません。

（事務局）　しかし、文化振興のビジョンとして、これから宇部市が進んでいきたい方向をまず示して、それに対して賛同などしていただける市民・文化団体などが、自主的・主体的に文化活動に取り組んでいただきたいと考えている。

また、市民の自主的活動に対して、行政として支援をしたり共同

で実施したりすることもあると考えているし、これまでも実施している。

行政が直接、宇部の文化事業全部に携わることはないので、宇部市の文化は、「この方向を向いて進めていきたい」と示すのが「文化振興ビジョン」になろうかと思います。

（会長）　文化に対する全体の方向及び行政が関わる目標を取り上げるということですね。

宇部全体の文化を「このようにしたい」という意思を公にして、これを市民が取り組んでいこうというイメージはあっても、具体的に誰がするかは、ビジョンでは決めなくて良いでしょう。

もちろん、最低限、行政機関の果たすべき役割を決めて、その活動内容・目標指標は策定すれば良いです。

文化活動そのものを、行政や資産家が資金を出すから、市民に「あれをしろこれをしろ」というのは、少し違うと思います。

しかし、文化が都市の活性化や魅力の向上につながったり、文化関連に携わる労働人口が増えたり、そういうことがあると思います。

なので、行政としては、市民の文化活動がやりやすいよう、市民・文化活動者にリーダーシップを発揮する場所をつくることが必要だろうと思う。

そういうことで、行政が目標指標をつくるもの、形式的な事業の「活動回数」など、「とりあえず実施しました」などというものは、やめた方が良いと思う。

目標指標は、意味のあるものに限定して、これを決めることで「みんなで宇部のまちを元気にしようじゃないかって」意気込みとか、そういったことが伝われば良いと私は思っている。

繰り返すが、何もかも数字だけにこだわって、それしか評価しないということはやめたほうが良い。

目標指標をつくるなら意味のあるものに集約したい。

それから、子どもたちがどういう風に育っていくのか、また、文化が継承されていって、まちが文化的に豊かになるのかということが一番大事と思う。

まだまだ言い足りたいという人がいるとは思うが、そろそろ時間

が迫ってきたので事務局から何かありますか？

（事務局）　改定案、骨子案ということで、今回は量的にも多めで、内容も一般論的なところで記載しております。

委員の皆さんのご意見や想いも含めてですが、全体的に重複している部分などを集約し、全体的に読みやすく、ご提案にあったよう宇部市の実情に即した言葉に変えていこうと思います。

また、ビジョンが示す方向は基本的な指針であり、行政が文化を押し付けるのでなく、市民が自主的に文化活動を行えるように支援できるようにすることが大事と考えているので、そのあたりのところも、次回までに修正していきたいと思います。

（会長）　ありがとうございました。

5 ページの「策定の背景と目的」が新たに入ったので、この見せ方ですね。9 ページの「宇部市における文化芸術施策の果たす役割」があるが、最初に国の動向などがあり、これで良いのか、あるいは、最初に宇部の状況や取組みがあり、その背景には国の施策のこれに繋がっている」としたほうが良いのか、どちらが良いか皆さんでいましばらく考えてみましょう。

それと重複しているところは推敲していって、削っていけると思うので、これはウェブページにもアップされ、市民が誰でも読まれますので、おそらく他の地方自治体の方々も関心がある方は見られるだろうから、見せ方の問題でまた皆様のお知恵を拝借して作り上げていきたいと思います。

それで、9 月 17 日までにご意見をいただいて、それを事務局のほうで整理していくということにする予定ですので、小さな誤字脱字なども含めて、ご指摘・ご意見をいただければと思います。